小学生の「税についての作文」優秀作品の紹介

徳島県知事賞

島の暮らしに役立つ税金

伊島小学校　５年
神　野　穂乃香

私は、租税教室で税の勉強をするまで、税や税金についてほとんど知りませんでした。買い物に行ったときにはらっている消費税についても、「代金のおまけ」みたいなものくらいにしか考えていませんでした。

しかし、税務署の方のお話を聞いて、「税金はみんなが幸せに暮らすための会費のようなものだ」と分かりました。税金がないと、病気になった時、治療費を全部自分で負担しなければならなくなったり、壊れた橋や道路も直したりすることができなくてそのままになってしまうそうです。とても困ることになります。私は、「税金ってだいじなものだな」と初めて思いました。

租税教室の後に校長先生が、「税金はみんなの大切な交通手段にも使われているんだよ」と教えてくださいました。それは、私たちの暮らしている町に関係することでした。私たちの町は離島なので、阿南や徳島の市内に買い物に行くときには、一日三便ある連絡船に乗らなければ出かけることができません。でも、その連絡船の代金は子どもなら往復八百十円ととても安くなっています。おばあちゃんに聞いてみると、船一せきで阿南と伊島を往復すると、とてもそんな値段では行けないそうです。改めてなぜ安いのかを校長先生に理由を聞いてみると、税金の中から決まったお金が伊島の連絡船に補助金をくれているそうです。それを聞いて、税金は私だけでなく、私の住んでいる島の暮らしに欠かせないものなんだなとつくづく感じました。

私は、税金のいいところは、払っている税金よりも、私たちの暮らしに役立っていることの方が多いという所だと思います。いくら消費税を払っても、私たちの暮らしのどこかで役立っていることを忘れないようにしたいと思います。そして税金の大切さを忘れず、少しでもみんなが幸せに暮らせる社会になるように協力したいと思います。

小学生の「税についての作文」募集（５、６年生対象）は、毎年、徳島県下各単位法人会が中心となって行っている租税教育推進事業で、平成28年度募集では県下全体で1,604点（110校）の応募がありました。

中学生の「税についての作文」優秀作品の紹介

徳島県知事賞

無言のヒーロー

三加茂中学校　３年
福　原　佑樹乃

先日、池田法人会の方に租税教室を開いていただきました。私の知らない税の話を色々教えていただきました。これを機にもっと税金について知っておきたいと思い、家に帰り国税庁のホームページを閲覧しました。小・中・高と年齢に応じた学習ができるようになっていて、とてもわかりやすく書かれていました。そしてそこに、税金が一番多く使われているのは社会保障関係費だと書かれていました。

私の父は十一年前、くも膜下出血で倒れ、歩くことも話すこともできなくなり、昨年亡くなるまでずっと病院でお世話になりました。父が倒れてから、収入は母一人のお給料だけになってしまいましたが、今まで不自由だと感じたことはありませんでした。それは母がお給料をたくさんもらってくるからだと思っていました。ところがそれは大きな間違いで、我が家ほど税金のお世話になった家はないのではと思われるほどでした。

父がくも膜下出血で倒れた時、九時間に及ぶ手術を受け、その後しばらくはＩＣＵに入っていました。その日の医療費の支払いは百万円を超えていたそうです。でもその時支払ったお金は、高額療養費制度という制度のおかげで自己負担限度額を超えたお金が戻ってきたそうです。そして、半年ほどして障害認定を受け、昨年亡くなるまで障害年金を受け取ることができました。そして、亡くなってからは遺族年金を受け取っています。今まで私が知っている税金といえば、消費税くらいのもので、税金は納めればそれで終わり、その後の使われ方など知りもしませんでした。だから、中学生の私にはあまり関係のないものだと思っていました。ところが、知らないところでこんなにもお世話になっていようとは思いもよりませんでした。この話を聞いたとき本当にありがたいと思いました。と同時に何だか申し訳ないと思いました。

税金を納めない人ができると、公平性に欠けるため、納税の義務は憲法で定められています。従って、ある程度の強制力があるためみんな税金に余り良いイメージを持っていません。税金は、色々に姿かたちを変えます。そして、「これはみんなが納めてくれた税金です。」と言ってはくれません。だから、知らないところで色々お世話になっているのに、私のように気付かない人が多いのです。我が家の家計を母一人が働いたお給料でまかないきれるはずもなく、社会保障制度のおかげで今までも、そしてこれからも生活していけるのだということが分かった時、税金は我が家にとってまさに、『無言のヒーロー』だと思いました。

これからさらに高齢化が進み、年金に、医療費にと、ますます税金の重要性が叫ばれることだと思います。私が大人になったら一生懸命働いて、少しでも恩返しができるようにしっかり納税したいと思います。

中学生の「税についての作文」募集は、毎年、徳島県納税貯蓄組合連合会が中心となって行っている租税教育推進事業で、平成28年度募集では県下全体で6,915点（83校）の応募がありました。

中学生の「税についての作文」優秀作品の紹介

徳島県知事賞

「税金」で命をつなぐ

徳島文理中学校　３年
大　本　　泉

昨年末、祖母は突然、旅立った。あの日からやがて八か月が経とうとしているが、祖母の死をなかなか受け入れることのできない、毎日である。

八十一歳の祖母は、いつも元気であった。高齢のため、少しずつ足腰が弱ってはいたが、出掛けることは好きだった。しかし、大変残念なことに、急に体調を崩し、救急車で住み慣れた家を後にした。祖母にとって、そして私たち家族にとって、ありえない最後の「出掛ける」ことであった。

救急車でまず近くの病院に搬送され、重篤な状態であったため再度、救急車で救命センターに運ばれた。緊急手術のかいなく、優しい微笑みを残して、逝ってしまった。

祖母が亡くなり、悲しみをこらえて、母は祖母がお世話になった病院やデイサービス、介護タクシー等の支払いに行っていた。いくつか支払いを済ませた母に「救急車に、二回もお世話になったのに、支払って来なくてもいいの。」と、たずねた。すると母は「救急車は、有難いことに、無料で利用できるの。それは、税金のおかげよ。」と、教えてくれた。私はこの母の言葉に、ハッと息を飲むほど驚き、そして、救急車にお世話になったことに対し、感謝の気持ちで、胸がいっぱいになった。

外国では、救急車は有料で大変高額であるそうだ。しかし、日本では救急車の費用は、自治体が負担していることを知った。全国的に一回、救急車が出動すると約四万五千円の費用がかかることが、調べて分かったことである。これらの費用が、税金で賄われているということは、私たちの「命」を税金が守ってくれているように思った。

そして、祖母が亡くなってから六か月余り経った頃、「後期高齢者医療給付支給決定通知書」というハガキが届いた。これは、祖母が救命センターで手術や治療等をしてもらい病院で支払った医療費に対し「高額療養費」と認められた分が、母の銀行口座に振り込まれたということだ。亡くなった後でも、このように税金をもとにした制度で遺族に支払われることに、改めて「税金」の大切さを知った。

このように、私はかけがえのない大切な家族を突然亡くすという経験をし、悲しみの渦に巻かれたような気持ちになったが「税金」に対して、新たな発見があり、その重みを知った。今でも、救急車のサイレンを聞くと、祖母のことを思い出し、胸がいっぱいになる。それと同時に、税金で助かる命がありますように・・と、祈る思いで救急車を見る。

私も将来、働いて税金を納める立場になるが、納めるだけでなく、税金の大切さを正しく伝えていける社会人になりたい。そうすることが、安定した、幸せな日本の基盤となり、世界になることだろう。命を守るためにも。